もくじ

１．キャンプサイト紹介・・１

２．キャンプ地設定の理由・・２

３．ワークについて・・３，４

４．レクについて・・５

５．スケジュールについて・・６

６．キャンパーの生活・・７～１０

７．メンバー紹介・・１１，１２

８．キャンプまでの道のり・・１３

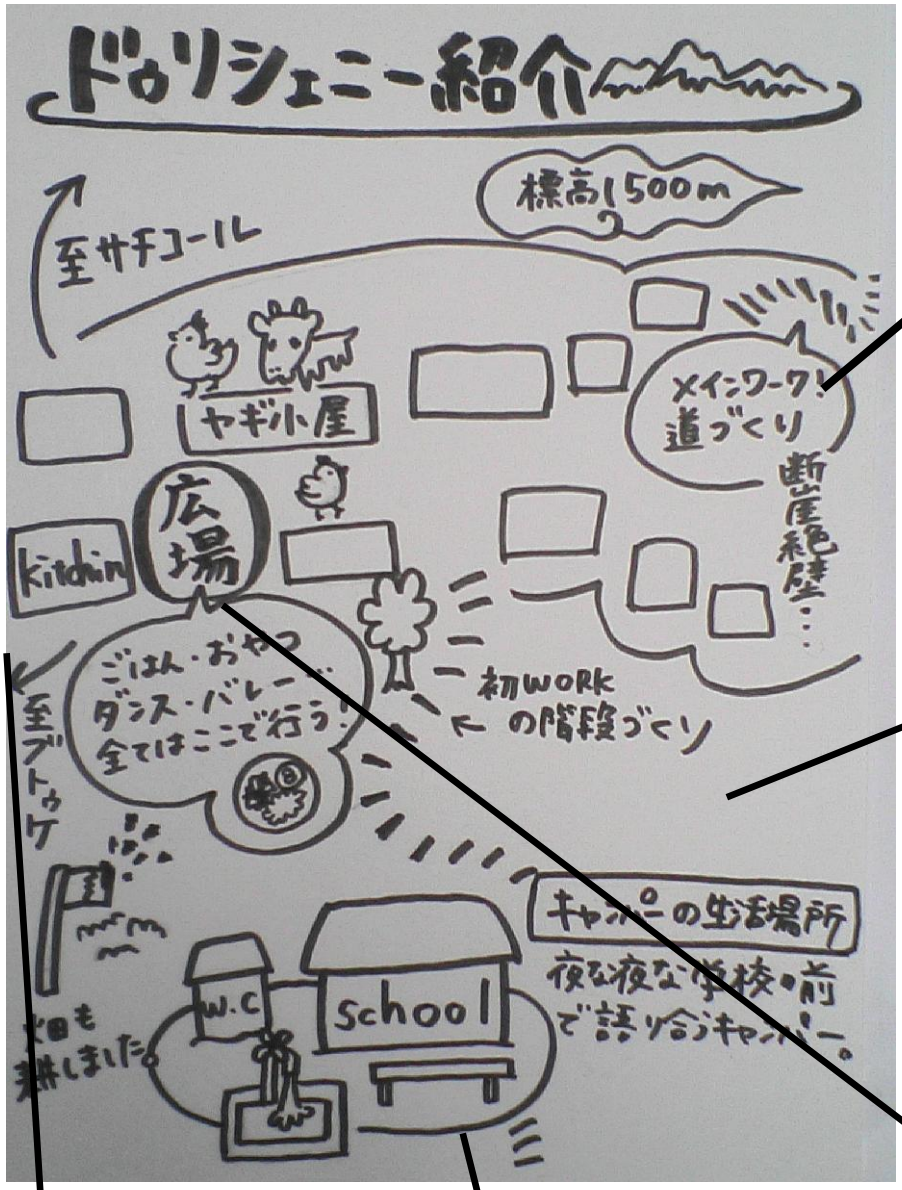
９．大人のいない村・・１４

１０．その他・・１５

ネパール

国名　：　ネパール王国
国教　：　ヒンドゥー教
面積　：　14．7万㎢（日本の約3分の1）
人口　：　約2474万人（日本の約6分の1）
首都　：　カトマンズ
民族　：　パルバテ・ヒンドゥー、ネワール
言語　：　ネパール語（公用語）、他多数

１．ネパールとキャンプサイト紹介



ゼロからの道づくりが始まる。まさに未知の領域。

ここからワークが始まった。登りやすさを徹底追及したこの見事な階段によって学校と村の行き来が楽になる。

食事、踊り、歌、ミーティングと何でもこなせる多目的ゾーン。動物も放し飼いで、臨場感もバッチリ！沢山の思い出が残っている場所でもある。

ユースクラブの皆が毎日アツい男の料理を作ってくれた場所。運が良ければ虹が見えるかも。

生活の中心だった学校。2週間も過ごせば家族同然。子供たちとも多くの時間を過ごした場所。

ネパールの山奥。日本人などめったに立ち寄ることのない場所に存在する村、ドゥリシェニー村。赤土の土壁でできた家屋、放し飼いにされている牛や鶏や山羊などの家畜、そしてゆったりと流れる時間。この村にいると、なんだか昔の日本の農村にタイムスリップしたかのような気持ちになります。

２．キャンプ地の理由　～何でこんな辺鄙な場所に～

語るバジさん

バジって？

「ＯＫバジ」こと垣見一雅さんは、私たちとドゥリシェニー村をつなげてくださった方である。
ネパールで暮らすようになって１０年以上。村人たちに頼まれると、何でも「ＯＫ、ＯＫ」と言っていたことから「ＯＫバジ（バジはネパール語でおじいさん）」と呼ばれるようになる。毎日村から村へと飛び回るバジ。彼へのオファーはやむことは無い。
「他の支援団体が入れるところは彼らに任せておけばいい。」と他の人が足を運ぶことが困難な奥地の村々を中心に自らの足で訪れ支援活動を行う。
「村人達と良く話すことが重要なんです。」と語っていたＯＫバジ。彼は村人の本当の声を一番大事にしている。
バジが街を歩けば村人が次から次へとバジに声をかける。「バジ！！」「バジ！！」「サンチャイチャ？（元気かい？）」前に進むことがなかなか出来ないほどであった。村人たちからの信頼がいかに厚いかということを感じることができた瞬間だった。ネパールで彼のことを知らない人は果たしているのであろうか。
政府や大きなＮＧＯでは手の届かない村人達の問題を解決していく「１人ＮＧＯ」。「政府やＮＧＯと村民との架け橋」。そんな言葉が彼を表現するのに最適なのかもしれない。村人が彼を頼りに助けを求めてくる。そして、その声に応えるためにバジは立ち上がる。バジはまた今日もどこかの村へと歩いているのであろう。

ＯＫバジと出会って・・・

「一人ではなにもできない。一人でできることなんて高が知れている。」
どこかでそんなことを考えてしまっていた私の考えを覆すような存在との出会いだった。
山の奥地で車も通ることのできない山道しかないような村にわざわざ歩いて出向き、電気も水もトイレも無いようなところに支援に入る。まず、生活環境の整備から始まる。そして次に教育を普及させる。すると、そこからリーダーが出るようになりそのリーダーを中心に村の自治を行っていくようになる。そうやって村人達が自立して生活できる環境を作る。一つ一つは小さな活動であったとしてもそれが積み重なった時の大きさは想像を絶するほど大きなものとなる。それと共に、一人で始めた活動も徐々に輪が広がっていき、今では多くの人たちがバジとともに活動している。たった一つの点であってもいくつも集まれば大きな円になる。大きな輪ができる。当たり前のことであるけれども、最初の点がなければ大きな輪なんてできることはない。最初の点となり、最初の点を作ったバジの偉大さを改めて感じる。　　ＢＹ　えりこ

古着

キャンプに行く前から、目的の一つとしてあげられていた「古着配り」。ドゥリシェニー村、17 世帯に古着を届けてきました！

日本食パーティの締めくくりで行われた古着配りには、抽選券を持った村人が列を成した。古着が詰まった袋、みんなで作ったミサンガ、おまけの鉛筆を手渡し、村人にもキャンパーにも嬉しそうな笑顔が広がった。

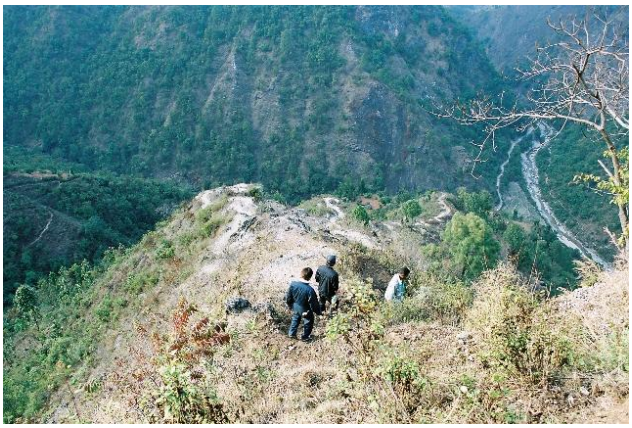
渡すときに、家族の人数を聞いた。ほとんどの家族が大家族で、6 人・9 人という答えが聞こえた。そんな中、「2 人」と答えた男性がいた。大家族の人数を聞きつつ驚いていた私は、一瞬耳を疑った。その家族は、お父さんと息子の二人世帯。しかも、家が火事にあったという苦しい生活をしていた。古着が入った袋の中に、このお父さんと息子に合う服が入っていることを祈った。 古着の袋は抽選を行うため、その家族に必要なものが入っているかはわからない。だから、本当の意味で役に立ったのか、はっきりとはわからない。でも、私のピンクのセーターが、村の子供の物になり着てもらう回数が増えたことを考えると、日本から持っていけたことを嬉しく思う。

「受け取る村人」

BY　まみこ

３．ＷＯＲＫ

今回のワークのメインの目的は村人たちがつかう道を整備、および開拓すること。
というのも、ドウリシェニーから最も近くにある大きな村であるリンネラハへと続く道は２つあるのだが雨季に使える道は一本だけとなる。
しかし、この道は非常に急でさらに表面には砂利がたくさんあるためによく滑り非常に危険である。
過去にも山道に慣れている村人たちでさえ２人も転落している。それゆえ今回の私たちのワーク内容が、この「道作り」に決定されたのである。
そして、村人たちのためにも非常に微力ながら協力してきた。



具体的な作業内容

①急な斜面は歩きにくいので階段をつくります。
まず、つるはしで土を少し掘り返し大まかな階段の形を作ります。次に、鍬で掘り返しながら平らな面をつくりつつ階段の形をよりはっきりさせていきます。最後に邪魔な土をどけつつ足で柔らかい部分を少し踏み固めれば階段が出来上がる。この状態でしばらく日にちが経てばしっかりとした階段になる。

②狭い道も歩きにくいので広くします。
鍬やつるはしを使って、ひたすら斜面側を削っていきます。ただし、このあたりは岩や石が非常に多い地質であるため非常に彫りにくい。とくに大きい岩はつるはしの尖った方で思いっきり振りおろさなくてはいけない。しかも何度も繰り返さなくてはまったく壊れない。そしてこんな岩がごろごろしているのだ。

ここでワンポイント。邪魔な大きな石を斜面からおとすときは「ラルララ～」と大きな声で叫ばなくてはいけない。もし下に人がいたら死んでしまいますから。そんな感じできれいなみちができあがる。

③急な道は危険。だから新しい道を造ります。
まず、邪魔な草木は火で燃やしてしまいます。次につるはし、鍬、スコップを使って大まかに道を造っていきます。ただし、ここまではあまりに危険なため村人たちにやってもらいキャンパーは見ているだけに留まった。
その後は前述したように道を広げたり、急な所には階段をつけ新しい道を造っていった。

ただし、先ほども書いたようにここは石が多い地質であり、さらに脆く崩れ安い。よって土砂崩れがおきる可能性が非常に高い。村人たちは長年の経験から土砂崩れが起こるであろう場所がわかるらしい。そして事前の人工的な土砂崩れを発生させるのである。
これによって人々が事故にあう可能性を減らすのである。生きる知恵である。

以上のような作業を繰り返すことで以前までよりもすごく素敵な道ができあがりました。ただ全ての作業を通じてキャンパーは自身の非力さを痛感するとともに、村人たちの体力に驚かされた。

他にも・・・

道造り以外に畑をたがやした。ドウリシェニーの土地は非常にやせていて１度掘り返すだけでは足りず、１度掘り返してからしばらく置き、その後また掘らなくてはいけない。
最初に掘り返す作業は非常に土がかたくつらい作業だった。
ここは、トウモロコシの畑になるそうです。

ワークをして・・・

ワーク初日が階段作りになったのは、柔軟でよかったと思います。初日にやったことで、それ以降の上り下りが格段に楽になりました。が、主にこのワークで恩恵を受けたのは日本人、（特に私？）かもしれないです・・・。なぜなら、村人たちは日本人よりもかなり山道に慣れているので、この程度の坂なら階段なしでも全く問題なさそうだったのです。（現に村の子供たちは、階段が出来上がったあとも、敢えて冒険をして階段ではないところを上り下りしていました）
山道整備は、思ったよりも危険だったので、（特に女性は）第一線でワークすることが困難でした。私たち全くの素人がワークキャンプをやろうという時点で分かっていたことではありますが、純粋に山道の整備をするということだけを考えるならば、お金だけ支援して、山道に慣れているネパール人に労働してもらうのが最短距離です。
では、私たちがネパールまで行ってワークする意味はどこにあるのでしょうか。私たちが行くことによって、山道整備を始めるきっかけが生まれます。そして、普段滅多に接することのない日本人と一緒にワークをすることにより、単調である作業にもおもしろさが生まれます。そうだとすれば、私たちがこのキャンプのワークで期待されているのは、無理に危険な作業に参加するというよりも、場の雰囲気を盛り上げて一緒にワークをすることのような気がします。勿論、ワークがバリバリできる、強靭な身体があるに越したことはありませんが・・・。

BY　あこ

４．レクリエーション

Let ‘s レク！

レクでは歌、大縄、ダンス、日本食パーティーをしました。大縄に関しては、ドゥリシェニ村では大縄ができるくらいのスペースがなかったためあまりできませんでした。
ダンスはキャンパーにフラダンスをならっている人がいたのでフラダンスをやりました。中身の方はやはり練習時間の少なさや思ったよりも体がうまく動かず、一同大苦戦でした。そう考えると国内にいる間から何回か集まって練習をしてもよかったとも感じます。

歌はふるさと、カントリーロード、日曜日よりの使者を歌いました。これの最後の部分だけネパール語訳して歌いもしました。ネパール語で歌うことで、村人たちに歌詞の意味を伝えることができ、遠い国である日本を少しでも感じさせることができたのがとてもよかったと感じます。

日本食はおしるこ、白玉、流しそうめん、ちらし寿司、味噌汁をふるまいました。どの料理も村人たちは喜んで食べていました。特に流しそうめんは村人全員で楽しめたようです。

レク全体を通して、練習不足などはあったものの成功であったと思います。それは言語が全く異なり自分の気持ちや日本の文化などが言葉で伝えることができないネパールでは、このようなレクによって打ち解けたり、感謝の気持ちを表現するのにレクは最適だと感じるからです。またキャンパー同士でも同じ目標を もって練習し、発表することは有意義なものであったと思います。

レク～sing a song～

特に歌に関しては、ネパール語訳した歌詞で歌うことでわずかではあるものの日本の文化を伝えられたような気もしました。また、ネパールの歌を日本語訳してもらったこともありました。それは Japan tokyo という歌なのですが、歌詞は「日本の東京という場所は知っているが、行ったことも見たこともない。」というようなものでした。そのときは歌詞の内容に思わず自分たちのいる環境を考えさせられたこともありました。今自分にはこの国に何ができて何をすべきなのだろうと。　違う文化、言語を持つ者同士が歌にしても何か共通のものを通して心通わせ、距離が縮まるのはすばらしいことだと感じます。僕が日本にいてもあの歌と共に村人や子供たちを思い出すように、ネパールの村人が歌とともに僕らを思い出してくれたら幸いです。

華麗なネパリーダンス